

〈新刊紹介〉

森 斌著

『万葉集作家の表現』

佐藤 茂樹

本書は『万葉集』の代表的作家を真正面から捉えた研究書である。森 斌氏にとつて、『万葉集』は本学に就任されて以来の研究テーマであると聞く。本書に収載された論文の多くは、授業の準備の中から生まれたものであるようだ。この書を手にした卒業生は、学生時代の授業の内容を懐かしく思い出すのではないだろうか。また、本学は今、大学院の開設を目指している。森 斌氏は恩師に、大学院開設に際して、自分に出来ることはと問いになられて、第一に博士号を取ること、次に研究書を出版することであると助言をいただいたそうである。こうした経緯により、森 斌氏の最初の論文集は生まれたのである。本書は以下に紹介するように四部構成になっている。

I 仮託短歌

第一章 磐姫皇后歌四首

はじめに、一 記・紀と万葉、二 四行詩の達成、

三 成立時期について、結び

『万葉』の独自性は、「記・紀が見せる激しいが類型的な女性心理に対して、万葉が愛に基づき悶々と堪え忍ぶ女性の葛藤を表現」していることであり、それは「連作によって可能になった」と考察された。そして、「四行詩の根底には、もの語る意識がある」とし、磐姫歌四首は「歌物語の起源と呼ぶにふさわしく、その成立は「持統朝から文武三年迄」と考察されている。

第二章 上宮聖德皇子歌

はじめに、一 片岡説話、二 行路死人歌、三 伝承と古歌、四 太子歌の起源、結び

「片岡説話の本質は、聖知聖」であるのに対し、『万葉』の「太子歌に表われるのは、慈悲に満ちた人間像」とし、『万葉』の竹原井説話は、片岡説話の伝承の過程で「自然に発生」したのではなく、「人為的な改変が」見られると考察された。そして、より本質的には、「下句が伝承の類似であり、上句と下句の対比による行路死人歌と地名の竹原井とが人為的な改更」と結論された。

第三章 有間皇子自傷歌

はじめに、一 磐代、二 松結び、三 「ま幸くあらば」と「また還り見む」、四 「筈に盛る」と「椎の葉に盛る」、五 一首一組について、結び

『ま幸くあらば』と仮定で願いつつ、『また還り見む』という運命を諦観することは、本当に悲劇的な人生を享受しなければならぬ本人」に出来ることではなく、「結局『また還り見む』は、有間皇子の意思でもなく、希望でもない。むしろ、かくあることを願いつつ、悲劇に終わつた現実を知る第三者の声でなかつたのか」と考えられ、「椎の葉に盛る」は神撰説が妥当との結論を得られ、更に二首一組構成の自傷歌は「有間皇子の時代に存在すべくもない」「構成技法」であつたことを明らかにされて、有間皇子歌二首は伝承された仮託歌であると考察された。

#### 第四章 人麻呂終焉挽歌群

はじめに、一 自傷歌とその題詞、二 実作と仮託、三 歌物語の構成、四 形成について、結び

人麻呂終焉挽歌群の『万葉集』に類型を見ない独自のものとして、『自傷』『臨死』の二語を題詞にもつこと、行路死人歌の伝統を踏まえつつ、自らの死を歌うなかに妹を登場させた歌であること」を考えられた。また「人麻呂山中死」と「人麻呂水死」という別の二つの伝承を統一させ

たのが人麻呂自傷歌群であり、その統一の時期は古本の段階とされ、「それが文献として記録されたのが聖武天皇初年頃」と考察されている。

#### II 皇子女の文学

##### 第一章 持統天皇の香具山

はじめに、一 季節歌、二 香具山歌の問題、三 衣乾したり、四 白砂の衣、結び

持統天皇の香具山歌の特徴は「霍公鳥や橘などの動植物によらないで季節感をうたう」点にあるが、これは「香具山の白い物は何かという問い、それを契機とした春の桜花の白妙衣ではなく、夏の卯の花の白妙衣とする二組の見立てで一首が作られた」と考察された。

##### 第二章 但馬皇女相聞三首

はじめに、一 朝川渡る、二 「竊」かな恋、三 独詠歌と贈答歌、四 歌物語の成立、結び

卷二の相聞歌三首は、「贈る目的で詠まれたというより」「独詠」であると考えられ、卷二の編者の「歌語りの興味」から付された題詞は「内容にずれを生じさせて」おり、それは「既に存在していた恋物語に支えられ、新しい恋物語を誕生させた」ことを示すと考察された。

##### 第三章 弓削皇子の紀皇女を思う歌四首

はじめに、一 弓削皇子と紀皇女、二 類型と個性、  
三 四首の構成、四 歌語りと歌物語、結び

類歌を有する歌でありながら、「雲に常なるものを感じて悲愁を詠んだ」歌や「叙景に託して孤独な心情を表現した」歌に個性が見られると考えられ、この四首は「歌語りと呼ぶべきではない」が、「連作による構成は、心情の持続的な、叙事を志向した内容を含」み、「磐姫皇后歌に学ぶ弓削皇子の四行詩ともいふべき新しい詩形であった」と考察された。

#### 第四章 志貴皇子懼びの歌

はじめに、一 伝記、二 言葉、三 蕨、四 晴の場、五 新春、結び

「題詩の『懼び』とは、春になった喜びを蕨との出合いに認めて作った歌」と考えられ、「志貴皇子の『懼び』は、新春とか新年とかを寿ぐ儀礼の歌」であり、「春の景物として蕨を歌った点に最大の功績が認められる」と考察されている。

#### Ⅲ 作品論

##### 第一章 人麻呂石見相聞歌

はじめに、一 固有名詞、二 歌の場、三 山、四 海、結び

石見相聞歌を風土と文学という視点から考察され、「山の名前が一つしかないと考えることが近代的である」として、地名の変更は「伝承過程で生じた違い」であり、固有名詞の変更は「都の人よりも地元の人によって改編される可能性がある」と考えられた。そして、山と海との対照に歌としての特質があるとされ、「山を越えるというとき、離別の悲しみがさらに増」し、「離別の袖振りの行う場所として、また異郷との接点としての山にとりわけ拘りを見せるのが石見相聞歌の特質」であり、「土地誉めの伝統を踏まえた海の豊かさを形容することで、別れなければならぬ石見の妹に対する恋慕を表した、まさしく石見の海という景物により、妹との悲しい別れの情を示した」と考察された。

#### 第二章 高市黒人歌の特質

はじめに、一 短歌歌人、二 棚無し小舟、三 「赤のそほ舟」、結び

黒人は宮廷歌人でありながら、「個性的な創作の場」を持つていたと考えられた。そして、「過ぎ去って行った『小舟』を『棚無し』とすることで、大海の点景に込められた旅愁が黒人の個性に高められた」のであり、「赤のそほ舟」は官船ではなく、「ひよっとして、もしかしたらと

いう願望を含みもたされた『神の舟』とでも呼称すべき舟」であり、「赤い舟が故郷を感じさせるのであつて」、この景は「黒人の夢見たものであり、決して事実としての叙景ではなかつた」と考察された。

### 第三章 憶良熊凝哀悼歌

はじめに、一 古日の歌と白水郎歌、二 序文、三 行路死人歌、四 敬和、結び

挽歌は死者に対する鎮魂が本質であるが、「語り継ぐべきものとして命を賭した友情と親子の愛の絆をうたう」点に、憶良的なものを認め、「代作という手法で子供から『孝』を語らせたのは、国守たる憶良であつたが、そこには庶民の感覚に近づこうとした」のであり、「熊凝哀悼歌は、国守として最後に作られたというだけでなく、帰京後に庶民的な素朴に創作する官人憶良の転換期のもの」と考察された。紙幅の関係もあり、以下、章・節題のみを記す。

### 第四章 憶良「男子の、名は古日に恋ひたる歌三首」

はじめに、一 左注「右の一首」、二 「古日の歌」の成立、三 「男子の、名は古日に恋ひたる」、結び

### 第五章 虫麻呂大橋の娘子歌

はじめに、一 盛装の娘子、二 赤い衣、三 橋上の娘子、四 独り去く娘子、五 橋を渡る娘子、結び

### 第六章 内舍人家持の挽歌

はじめに、一 伝統の表現、二 類型的表現、三 個性、四 創作の動機、結び

### IV 万葉集と日記文学

#### 第一章 家持の歌日記

はじめに、一 万葉集と日記文学、二 形態について、三 書簡と歌論、四 持続的に描かれた内面、結び

#### 第二章 東征伝

はじめに、一 主題について、二 広伝の性格、三 紀行文学の性格、四 虚像について、結び

#### 第三章 来南録

はじめに、一 来南録と土佐日記、二 日記紀行の形態、三 類似の比較、四 紀行文学として、結び  
遙かな昔、遠い万葉の時代に思いを馳せ、見ぬ世のことを、万葉人の人生を本書において、森 斌先生は解明されたのである。本紹介文における理解不足、誤読、曲解は全て私の責任である。

(一九九三年十月二十日刊 A5版三二六頁 八七五五円、

和泉書院)